

氏 名	岡 本 真 一 郎
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	論 文 博 第 353 号
学位授与の日付	平 成 10 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	言 語 表 現 の 状 況 的 使 い 分 け に 関 す る 社 会 心 理 学 的 研 究

(主査)

論文調査委員	教 授 清 水 御 代 明	教 授 苧 阪 直 行	教 授 乾 敏 郎
--------	---------------	-------------	-----------

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、Brown&Levinson (1978, 1987) の言語表現の丁寧さに関する理論や、日本語における敬語研究、最近の語用論、社会言語学的観点からの、状況と言語表現に関する理論などをふまえて、言語形式の状況的使い分けを社会心理学的に検討したものである。要求表現と情報への関与度による文末形式の変化について、社会心理学的な諸変数を統制した実験に基づき、状況要因と表現の使い分けの関係を体系化することを目指している。実験はほとんどの場合、被験者に場面を記述したシナリオを示し、その状況でどのような発話をするかを質問紙に筆記させる手続き、または口頭でロールプレイさせる手続きで行われた。論文は序章とそれに続く3つの章からなる。

序章には、本論文の研究の背景として、言語表現の使い分けについての概説、対人配慮と言語表現に関するBrown & Levinsonなどの議論の紹介、日本語における狭義の敬語および広義の対人配慮の表現に関する研究の概観が与えられ、本論文の研究方針の概略が提示されている。

第1章では要求表現をはじめとする行動指示表現が取り上げられた。まず、要求や行動指示の表現について、諸研究者による定義や表現形式の分類法を通覧し、状況的使い分けに関する諸研究の知見を概観した後、この問題に対する本論文の取り組み方が説明される。本論文では、聞き手になんらかの行動を指示する言語的な働きかけのうち、それによって話し手が利益を得ることを意図する場合を要求とし、要求表現の形式は次のように分類される。要求内容を明示する表現は、間接性の程度(行動の意図が字義的に明示されていない程度)と敬語の使用状況とによって分類される。要求を明示しない形式には、典型的なものとして、話し手側事情表現や聞き手側事情表現、省略表現がある。まず明示的表現について、次いで非明示的表現についての実験的検討の結果が報告される。

明示的な要求表現形式の規定因を検討した実験は、聞き手の負担量への配慮と、話し手と聞き手の対人関係が使い分けに影響することを基本的仮定としている。まず、実験1-Aでは、日本語の要求表現が要求を履行する際の要求量によって使い分けられることを、対等な地位の親しい話し手聞き手間のロールプレイ実験によって検証した。要求量が大きいほど聞き手の負担が配慮され、表現が丁寧になる(表現がより間接的になり、付加的な表現が多用される)という仮説を支持する結果が得られた。実験1-Bでは話し手と聞き手の親疎や地位関係が様々であっても、要求量による使い分けが行われることが、質問紙実験とロールプレイ実験によって検討された。要求量が大きいほど表現が丁寧になることを再確認するとともに、要求量の要因と話し手聞き手関係の要因とでは、影響を受ける言語的側面が異なることが明らかになった。要求量は要求表現の間接性に影響し、話し手聞き手関係の要因は、主に敬語使用に影響を及ぼす。聞き手の負担への配慮が要求表現の間接化に影響するのであれば、負担への配慮が免除されるような状況では間接化が生じにくいと予想される。実験1-Cでは、要求がおおざりな実験条件、聞き手の役割に沿っている実験条件、要求の緊急性が高い実験条件では、それぞれ、統制条件に比べて直接的表現が使用されやすいことが確認された。

議論は、話し手が聞き手自身の利益のために聞き手に行動を勧める状況の行動指示表現にも拡張される。この状況では聞

き手に利益がもたらされるので、話し手が行動に伴う聞き手の負担に配慮する必要が打ち消され、間接的表現はほとんど使用されなくなると予想される。実験1-Dでは、親疎や地位の関係のさまざまな聞き手に対して、物理的には同じ行動を指示する場合でも、それが要求であるか勧めであるかによって表現が使い分けられ、後者ではほとんど間接的表現が用いられないことが確認された。

非明示的な表現の使用については、実験1-Eで話し手側事情表現を中心に検討された。聞き手の履行義務が明瞭な状況では事情表現が用いられやすいこと、話し手聞き手間の地位関係は事情表現の頻度に影響しないこと、先行発話によって示唆される聞き手の知識状態が事情表現の頻度に影響すること、要求と勧めの間では事情表現の末尾の助詞が使い分けられることが検証された。

第2章は「情報への関与と文末形式」と題して、神尾(1990)の情報のなわ張り理論を検討している。この理論は、日本語平叙文の文末形式における直接形と間接形の現象を説明しようと提唱されたものである。直接形が情報をそのまま事実として確定的に表現するのに対し、間接形は、推測、伝聞、引用等不確定な形式で表現する。直接形と間接形の使い分けには、話し手が情報に関する証拠を確実に所有しているか否かや、それに基づく話し手の確信の程度が影響することはよく知られているが、神尾は、直接形、間接形が証拠の確実性や確信によらないで使い分けられる場合が存在することを指摘し、語用論的考察を通じて、情報のなわ張り理論を提唱した。情報が話し手と聞き手のいずれのなわ張りにあるかによって間接形を用いたり文末に助詞「ね」をつけたりする傾向が異なるという論である。論者は、この情報のなわ張り理論の問題点を検討して、そこでは明確に区別されていない情報への関与度と証拠の確実性を区別する新しいモデルを提案し、確実性と関与度は次のように文末形式に影響すると主張する。話し手の絶対的な確実性が低いほど直接形より間接形が使用されやすくなり、話し手の確実性が聞き手と同等程度以下になると文末の「ね」が使われやすくなる。話し手の情報への関与度が聞き手の関与度より低いほど、間接形や文末の「ね」の使用傾向が強まる。話し手の関与度が聞き手よりも高い場合には、直接形や「ね」のない文が使用されやすくなる。ただし、話し手、聞き手の確実性によっては、直接形対間接形か、文末の「ね」の一方だけの使い分けが行われることもある。この関与表現の使い分けは、要求表現の使い分けと同様、対人配慮によるものであることが論じられた。聞き手の関与度の高い情報を直接形や「ね」のない文で表現すれば、ぶしつけて差し出がましい印象を与える可能性があり、話し手はこの点に配慮して、あたかも情報を確実に有していないかのように、間接形や「ね」で終わる文を用いると論じられる。

一連の質問紙実験によって、関与度による文末形式の使い分けが検討された。実験2-Aでは聞き手の証拠の確実性がゼロのときの関与度による使い分け、実験2-Bでは話し手と聞き手の証拠の確実性が同等の場合の関与度による使い分け、実験2-Cでは情報の重要性が形式に及ぼす影響が検討され、いずれもモデルの予想通りの結果を得た。他の研究者が挙げている使い分けの事例をこのモデルで説明できることを論じた上で、さらにモデルの適用範囲が吟味された。実験2-Dでは、話し手と聞き手の対人関係の親疎によって関与表現の使い分けが影響を受けるかどうかを検討され、親疎の要因は関与度に比べれば文末形式に大きな影響を及ぼさないことを示唆する結果を得た。実験2-Eではモデルを疑問文を含めたものに拡張する可能性を示し、実験2-Fでは関与度が前置きとしての注釈表現の使用にも影響することを検証した。実験2-Gでは聞き手にとって望ましくない情報を伝達する場合にも間接形が使用されやすくなることを示した。

第3章の「総合的考察」においては、まず、Brown&LevinsonやLeechの丁寧さの理論を、本論文や関連する他の研究者の研究結果に基づいて再点検し、それをふまえて日本語の要求表現、関与表現を包括して説明する大要次のような枠組が考察された。要求表現の間接化と関与表現における間接形の使用は、字義的な内容を話し手の本来の意図から遠ざけて表現するという意味で共通点があり、あらためて両者をまとめて「間接化」と呼ぶことができる。これら2種類の間接化は、言語行動により聞き手に負の影響がもたらされる場合に生ずるという点でも共通している。日本語の言語表現の状況的な変容としては、聞き手との対人関係(親疎関係や地位関係)による敬語の使用不使用がよく知られているが、間接化はそれとは異なった言語的側面の変容であるといえる。さらに一般化すれば、要求や関与表現以外の領域でも、聞き手への批判、悪い知らせの伝達など、聞き手に対して何らかの負の結果が及ぶ言語行動全般において間接化が生ずる可能性がある。他方、聞き手への負の影響に対処する言語的手段は間接化のほかにも存在し、その一つが注釈であると考えられる。このような状況要因と間接化、敬語使用の関連を記述する枠組が図にまとめて提示された。

## 論文審査の結果の要旨

話し手は聞き手に対する配慮からさまざまな言語表現形式を用いる。本論文は、このような表現形式の使い分けの問題に、実験社会心理学的な立場からアプローチしたものである。本論文では、要求表現の諸形式と、情報への関与に伴う文末諸形式の体系化が試みられた。

言語表現の状況的規定因については、社会言語学、語用論、認知心理学、言語人類学など、さまざまな方向から研究されてきた。本論文が直接関わりをもつ対人配慮と言語表現の丁寧さの問題については、日本語の敬語（待遇表現）研究のほか、Brown&Levinson (1978, 1987) やLeech (1983) のように世界の諸言語に普遍的な丁寧さの理論の確立をめざすものも現れ、日本語の待遇表現の研究にも丁寧さの理論を視野に入れたものが見られる。言語表現は対人行動の最も重要な手段の一つであり、従って対人関係のよい指標の一つであると考えられるが、このような微妙なことばの使い分けに関する社会心理学的な研究は乏しく、論者はこの分野で日本語を対象とする数少ない先導的研究者の一人である。

社会心理学的方法の特色の一つは、状況要因を社会的諸変数の観点から整理しようとするところにある。これによって、個々の状況と言語表現の諸形式との関係を羅列的に記述するのではなく、表現の使い分けをその背後にある変数によって体系的に説明することが可能になると期待される。本論文でも、要求量、聞き手との地位関係、情報への関与度など、いくつかの変数を導入して考察が進められた。社会心理学的方法のもう一つの特色は、こうした諸変数を操作し、他の状況的要因を統制した実験を行って、被験者の反応を統計的に解析することにより、状況と表現形式との関係を明らかにしようとする点にある。この方法によって、たとえば状況変数と複数の可能な表現形式の使用頻度との相関関係の検討が可能になる。本論文で次のような点を明らかにできたのはこの社会心理学的方法に負うところが大きい。

明示的な要求表現は、話し手と聞き手の親疎あるいは地位などの関係のみでなく要求量や要求の緊急性など、聞き手の負担への配慮の必要性によっても使い分けられる。また、データの多変量解析等を通じて、話し手聞き手関係要因による使い分けは主として敬語の次元の丁寧さに影響し、聞き手の負担への配慮に関わる要因は主として表現の間接性の次元に影響するというように、状況要因の種類によって影響を受ける言語的側面が異なることが明らかにされた。さらに、要求表現での使い分けの原則を聞き手の負担への配慮という観点で整理して、勧告のような他の行動指示表現にも拡張して適用できることも示唆された。また、非明示表現の使用には、明示表現の諸形式に影響するものとは異なった要因が関連することが明らかになった。

情報の関与度による文末形式の使い分け（直接形か間接形か、助詞「ね」の使用）に関しては、神尾（1990）の「情報のなわ張り理論」に綿密な検討を加え、新たに話し手と聞き手の証拠の確実性と情報への関与度の2要因による使い分けのモデルを提唱し、それを実験的に確認した。さらに、モデルの考え方を拡張して、関与度による疑問文や注釈表現の使用も同じ枠組みで説明可能なこと、望ましくない情報の伝達のような、関与表現以外の言語行動についても、間接化と類似の現象が生ずることを示した。

これらの知見は、表現形式の社会心理学的研究に次のような展望を与える。要求表現と関与表現には、表現の直接性間接性においても、間接化に影響する要因においても共通点がある。言語表現の丁寧さの中には、間接化のように敬語使用とは異なった状況要因の影響を受ける側面があることに着目しながら、要求や関与表現以外の言語行動や言語表現にも視野を広げれば、聞き手に負の影響をもたらす言語行動全般にわたって、状況と表現の関連を体系的に説明できると期待される。

聞き手に負の影響を与える度合いや、話し手と聞き手の親疎、地位関係が、用いられる表現の丁寧さに影響することは、世界の言語に普遍的な事実であろうと推測されている。本論文は日本語についてこれを具体的に確認したことになる。ただ本論文の結果から、日本語の場合、表現の丁寧さの中にも間接化と敬語の使用のように異なった面があること、すなわち丁寧さを一律に捉えられないことも明らかにされた。これはBrownたちが世界の諸語について丁寧さを論じた場合には予想していないことであり、これが日本語の対人配慮表現の特徴を示すものかどうかは興味ある問題として残されている。

このように、言語表現形式に作用する社会心理学的要因の体系的把握に重要な貢献をした論文であるが、影響を受ける表現形式の状況要因による相違の説明や、作用の形成因など、なお解明されるべく残された問題は多い。しかし、これらは本論文による体系化を通じて明らかになった問題というべききもので、むしろ論者の研究を一層の発展を期待させるものである。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、1998年7月2日調査委員3名が論文内容とそれに関連することがらについて口頭試問を行なった結果、合格と認めた。